

書評 市井外喜子著『天草版平家物語私考 続』

関 口 忠 男

本書『天草版平家物語私考 続』（2005年 新典社）は、著者の前著『天草版平家物語私考』（2000年 新典社）を受け継ぐもので、前著と合わせて、著者の『天草版平家物語』研究の到達点が開示されている。

著者市井外喜子教授は、周知のとおり、計量言語学的方法による方言研究を永年続けられ、多くの業績を挙げてこられたが、そういう研究の中で、1900年ごろからは『天草版平家物語』を対象とした研究成果の発表が顕著にみられるようになり、それらの研究成果が、上記の二書にまとめられたわけで、このことは、『天草版平家物語』研究史上、まことに注目すべきことである。

著者は、前著『天草版平家物語私考』において、『天草版平家物語』巻第一・巻第二を対象として、「Ⅰ 天草版平家物語の構成」、「Ⅱ 天草版平家物語の語句」という二部編成として、その成果をまとめられた。「Ⅰ」では、『天草版平家物語』（以下、天草版平家と略称）と古典平家（高野本）とを対比することにより、天草版平家は、仏教的視点からではなく、「をごりをきわめ、人をも人とも思わぬようなるもの」としての清盛の、「行儀の不法なことをのせたもの」として語られたもので、そのために巻第一においては、鹿谷事件の顛末・後日譚に焦点を絞り、白山事件関連の叙述は割愛されていることを指摘されるとともに、これによって、外来宣教師の日本語テキストとして、内容の把握を容易にせしめているとみられる。著者は、天草版平家の意図するところを明快に読み解いているわけである。また、巻第二の依拠本として、古典平家の諸本との対比により、百二十句系統本のものという推定を下されたことは、たいへん貴重な指摘である。「Ⅱ」では、天草版平家の語句の中から、「Tentō（天道）」、「善知識」「往生の素懐」、「Yume」、人称詞としての「わらは」「Vatacuxi」「Sonata」「Vatono」「なんぢ」「おのれ」「Sochi」、さらに、「Yūbe」「明日」について考察を加え、これらの語句を古典平家の用例と比較することによって、天草版平家の特徴を導き出している。特に古典平家における「天照大神・正八幡宮・八幡大菩薩・神明」などを、デウスを意味する「天道」に改めるといふ、従来の日本の仏教・神道に対峙した視点の指摘をはじめ、人称詞の考察から古典平家と天草版平家の持つ響

きが異なる一因を探究したりなど、注目すべき考察が並び、天草版平家の特徴が鮮やかに導き出されている。

本書『天草版平家物語私考 続』は、これらの研究成果を踏まえて、その後の研究を集成してまとめられたもので、前著と同様に、「Ⅰ 天草版平家物語の構成」と「Ⅱ 天草版平家物語の語句」とから編成されている。

まず、「Ⅰ」では、天草版平家の巻第三・巻第四の構成を考察する。天草版平家の巻第三は、古典平家（国会本）の巻第六～巻第八に、同上巻第四は同上巻第九～巻第十二に、それぞれ相当すること、古典平家から天草版平家への内容の大胆な組替えが、編者不干ハビヤンの編集意図に基づくものであることを指摘される。また、天草版平家の各巻冒頭章段のすべてに編者の工夫がみられるが、これも日本語テキストとして『平家物語』を、よりよく理解させようという意図に基づくものであることを明らかにされている。特に天草版平家では、古典平家「祇園精舎」の冒頭部「祇園精舎の鐘の声～偏に風の前の塵に同じ」という、作品の総序に当たる部分が排除されており、古典平家の主題にもかかわる諸行無常・盛者必衰という仏教思想が敢えて削除されているという、古典平家と大きく乖離した現象については、ここに古典平家から独立した天草版平家が象徴的に現われていると解される。

著者は、このようにして、天草版平家の構成の上で、日本語テキストとして、『平家物語』の内容を明快に、かつ容易に理解させるための記事の組替えが大胆に行なわれていることとともに、宣教師のための日本語テキストという立脚点から、古典平家の中の仏教的・神道的要素が巧みに排除されていることを詳細に究明され、天草版平家の特徴を明確に打ち出されたのである。

「Ⅱ」では、最初に天草版平家の巻第四第八章段の前半部（大手生田の森の合戦のこと）に注目し、これを古典平家（国会本・京都本・斯道文庫本・小城本：百二十句系統本、龍大本・高野本・葉子十行本・流布本：覚一系統本）と比較・検討した結果、百二十句系統本が古典平家の依拠本であることを推定された。これは、前著において天草版平家の巻第二の依拠本として百二十句系統本を推定されたのと合わせて、その可能性をいよいよ大ならしめることである。このことは、伝統的な『平家物語』研究上の諸本論からみても、たいへん貴重な指摘である。ついで、天草版平家において、聞き手兼進行役の右馬の允と、話し手の喜一検校との両者の間の対話時における対称詞を考察し、右馬の允から喜一検校に対する対称詞は「Sonata」、喜一検校から右馬の允に対する対称詞は「Conata」であり、右馬の允が「Conata」―「Saxerare」と遇されるのに対して、喜一検校が「Sonata」―「Vocatariare」、「Vatacuxi」―「Marasuru」と遇されていることを指摘され、ここには、上下関係が明確にみられること、また、現代方言に生きて

いる「コナタ」「ソナタ」は、ここにみる「Conata」「Sonata」を受け継ぐものであることを論究されている。さらに、天草版平家にみられる「VOZOL」が古典平家には見られず、当時の口語性の濃厚な語であること、「VOTOTOL」について、和語系「おととい」の高野本・龍大本に対して、漢語系「irfacujit」の天草版・国会本という、呼称上の対立のあることを指摘され、その上に、「qeô」を規準にして、過去の日にちの呼称と未来の日にちの呼称とを吟味した結果、高野本が和語系日にちの呼称を用いるのに対し、天草版平家は和語系・漢語系双方の呼称を用いることを見出され、このような天草版平家の日にち呼称の豊かさは、外来宣教師の日本語テキストとしての配慮に因るものであるととらえ、ここに編者不干ハビヤンの観察力の確かさがみられると結論づけられる。

著者の『天草版平家物語』の研究は、著者自身が記されているように「文学的な読みの側面と、国語学的な読みの側面の融合」を意図されたものであるが、著者は、前著と本書とを合わせて、みごとにその意図を達成されたと言えよう。特に注目されるのが、『天草版平家物語』に対する「文学的な読みの側面」を積極的に開拓されたことである。従来、国語学上の貴重な言語資料としての考察が進められてきた『天草版平家物語』の研究においては、その文学的側面への考察は等閑に付されてきたと言っても過言ではない状況の中において、著者のこの側面に対する果敢な挑戦は、極めて重視される。そして、その成果が、本来、国語学者である著者による、専門的な国語学的な読みと融合されたのが、上来見てきたごとき研究成果であり、これによって、『天草版平家物語』が今まで見せなかった、新しい姿をわれわれの前に現わすこととなったわけである。

伝統的な『平家物語』研究の世界では、『天草版平家物語』は、その研究対象の埒外に置かれていた状況があった。夥しい異本を有する『平家物語』においては、諸本に対する研究が重要な課題となっているが、『天草版平家物語』は、その諸本論においても、その対象から外されてきたという実状がある。近年、漸く『天草版平家物語』を諸本論に加える動向が見えはじめてきている。そういう折も折、著者の研究成果の公刊は、伝統的な『平家物語』研究と、言語学的研究の流れの中にあつた『天草版平家物語』研究とを架橋するという、たいへん重要な役割を果たすものとして、高い評価を得、学界に裨益するところ大なるものがあると思われる。

(2005年10月 新典社刊 190頁)